
空白にあるもの

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白にあるもの

【Nコード】

N4505A

【作者名】

NAO

【あらすじ】

人は何かを比べて生きていく。それが誰かを傷つけると分かっている、人は何かを比べなくては生きていけないのだ…

車のエンジンが僕を揺らす。

早く走らせてよ、と僕を催促するかのよう。

僕は、しつとりとしたバラードを車内に響かせながら、白い雪がフロントガラスに落ちるのを眺めていた。一つ、また一つと、フロントガラスに雪が積もっていく。そして、僕は思いついたようにワイパーを動かし、雪を払う。

もうすぐ、彼女はここにやってくる。

フロントガラス越しに見えてくるであろう彼女の姿を思い浮かべてみる。真っ白なコート、首もとには大きなフェイクファー、黒いロングブーツを履いてくる。そんな予感がした。

僕は、座席を倒して、エンジンを切った。車は力を失っておとなしくなり、バラードを歌っていた女性シンガーも、サビの途中で歌うのをやめた。車内が、静寂に包まれる。深々と降り続ける雪の中で、僕は大好きな映画で流れてくるメインテーマを口笛で表現した。目をつぶると、すぐにでもその情景を思い出すことができる。台詞まで、鮮明に。

「また、観たいな……」

僕は、口笛をやめてつぶやいた。高い音程になると、決まって上手く口笛をふけない。高い音程を出したくて唇をどんどん細めていくと、しまいにはただの吹く息と化してしまうのだ。唇を湿らせて再度挑戦するも、やはりそこで吹けなくなってしまうのだ。

印象的な曲、幻想的なシーン。いつでも僕の頭の中で上映できるのに、音楽だけは再現できない。まるで背景音楽のない、映画だった。

僕はため息をつく。

ガラスがノックされる音に僕は体を起こす。僕の想像通りに白いコートを着たアキがニコニコしながらドアの脇に立っている。少し

かがんだ体勢で足踏みをしているアキを、僕は車の中に招きいれた。
「寒くて凍えちゃう」

エンジンをかけて車内のエアコンを入れると、勢いよく温風が飛び出した。続けて、歌うのを中断させられていた歌姫も歌いだす。
「よく寒いのを我慢できるね」

凍った手をこすりながら、僕のほうに笑いかける。頭に積もった雪が車内の温度で溶けて、水の玉になっていく。

「雪国出身だから」

「そういう問題なのかな」
首をひねって考え込む。

「南極に住んでいる人が、北海道に来るようなもの？」

「極端に言えばね」

「ふーん、そんなものなんだ」

アキは神妙な顔つきで、温風を握り締める。

「ふと思うんだけど」

アキは、思いついたように僕に顔を向ける。

「何？」

「昔、雪合戦したよね」

「学校の校庭での話？」

「そうそう」

アキは高校時代の思い出話をしているようだった。思い出して、はにかむように笑って、白い歯がこぼれる。

「あの時はごめんね」

「いまさら、だけどね」

「でも、あの時は本当にあせったんだよ。まさか、気絶しちゃうとは思わなかったから」

「雪の中に特大の石を詰めた時点で、気付いて欲しかったよ。もし頭にぶつかったらどうなるか、とかさ」

「シンならよけると思ったから。シンだって、私が女だってこと忘れて、ばしばし雪をぶつけるんだもん。私、悔しくて……」

「それで、石を詰めて、倍返し？」

アキはふくれっ面で小さくうなづいた。頬が紅色に染まっているのは、恥ずかしさからか、外気温のせいか。とにかく、僕はそうだった表情豊かなアキに親近感を覚える。春夏秋冬が、そのまま喜怒哀楽になったような、感情のはっきりした女性。見ていてこちらまで楽しくなってくる。

「悔しかったんだよ」

「何で？」

「いつも、私の負けだったから」

僕は、座席を元の高さに戻して、アキを窺った。

「シンは、いつも私に勝ってた。そうでしょ？」

「それは、絶対評価で、だろ。点数で評価されれば、仕方ないさ」
「絶対評価でも、相対評価でも。とにかく、当時は、連戦連敗だった」

「でも、今は違う」

「うん。そんな風にシンのこと見てないから」

「なら良かった」

僕は、ブレーキペダルを踏みつけ、サイドブレーキを下げた。シフトをドライブに入れると、車はまるで散歩に行きたがる犬のように尻尾を振り、体をゆする。

「シンは、どんな風に見てたの？」

駐車場から抜けて、国道へと入る信号機で、車は再び停車する。

「妹」

ワイパーを忘れていたので、作動させながら僕は答えた。雪が視界から払われる。

「妹だよ」

反応が返ってこないの僕は繰り返した。

「かたやライバルで、かたや妹、か。その差は歴然だね」

「差なんてないだろ。何でも比べたがる癖、やっぱり直ってないな」
「……そうみたい」

「フォローではないけど、悪い癖だと言っててもないから
信号が青へと変わる。」

「比べることって大事だと、僕は思う」

雪をまとった情景がフロントガラスをすり抜けていく。

「自分や相手を比べることも？」

「大事だと、思ってる」

「普通、あんまり言わないよね、そういう答え。人から嫌がられそう」

「ほら、比べてる」

「屁理屈」

「……そうだけどさ。比べることから、感情は生まれるんだと思う。
『あの人が好きだな。じゃあ、つりあうように努力しよう』……つりあうってことは、比べるってことじゃないかな。ほかに、僕らは知らず知らずのうちにさまざまなものを比べてるんだと思う」

アキは少し悲しそうな表情を見せた。

「……だからなのかな」

ワイパーの音がむなしく響いた。

「私がシンにふられたの」

温めていた手をコートのポケットに入れる。

「雪合戦のとき、シン、保健室に運ばれたでしょ？」

「うん」

「あの時、私、傍にいたよね？」

「いた」

「ずっと、傍にいたよね？」

「……いた」

「嘘」

窓の外に目を向けているアキは、外を見ていたのだろうか。それとも、僕の顔を見たくないからそうしているのだろうか。

「空白の時間。僅か十分だけど、とても大きな時間。私は、シンの傍を離れて、保健室を出た。シンは、そのとき起きてたんだよね」

？」

「……」

「そして、戻ったとき、シンは何事もなかったかのように寝ていた。うっん、寝たふりをしていた」

方向指示をあげて、斜線を変更する。赤信号の下に青い矢印が点灯したので、僕はハンドルを左に回した。図ったかのように、バーストが終わり、車内は静まり返ってしまう。

「何があったの？ あるとき。私と、シンと、先生と三人しかいないあの空間で、私だけがなくなったあの時……」

前に行くバスのナンバーを見つめ続ける。見つめ続けてはいたが、記憶されることは絶対がない。

「私、本当は知ってる。でも、自分から言いたくない。でも聞きたい。シンに否定して欲しい。でも事実だって知ってる。ぐるぐる回るの。私の頭の中に。もしかしたら、もしかしたら、って。想像が妄想になる。心が痛くなつて、そんな想像やめたくて、でもやめられなくて。苦しくて、思い出して、可能性を探って、空白に時間を埋めるために。事件を捜査する刑事みたいに。アリバイとか、聞いたりもした。でも、否定できなくて。私……傷つきたくない。怖い。でも、このまま知らないでいるのも嫌」

運転する僕に向かって、自嘲気味に笑うアキ。そして、暗い闇の中に沈んでいく。

「比べてるんだよ……。このまま事実を知らないでいる私と、事実を知った後の私を。その、心の痛みを」

「……あれから、二年がたつけど、僕達は今でもその三十分を大切な時間だと思ってる」

僕はハンドルを握り締める。

「……こんな痛みだったんだね。予想以上だよ……」

行くあてもなくハンドルを回す僕の車は、ただ街中を迷走するだけ。いやおうなしに、この車という矮小な空間は、二人の痛切な感情を閉じ込める。

捌け口もなく、膨れ上がっていく車内の空気に、僕はパンクしそ
うだった。

それは、アキも同じだったろう。

「ひとつ言っていていいかな」

僕は首肯の意味を込めて黙っていた。

「シン、好きだよ」

「……ごめん」

「好き」

「……ごめん」

「ずっと昔から、好きだったよ。本当だよ」

「ごめん……」

嗚咽が聞こえてくる。僕の目をはばかりことなく、落涙で雪のよ
うなコートを濡らす。涙というのは、こんなにも頬をつたうものな
のだろうか。一滴の涙なんて態のいいものではない。まさに滂沱だ
った。

何もできず、何も言えず、僕はただ車を走らせる。

「雪合戦なんて、しなければよかった」

それが、彼女の最後の言葉だった。雪合戦……その言葉の陽気さ
とはあまりにもかけ離れた結末。

迷走していた車から降りたアキは、僕に背中だけを向けて歩いて
いく。

白いコートに、黒いロングブーツ。

昔から仲が良くて、いつも一緒にいて、誰よりも身近だった存在。
誰よりも話をした人。誰よりも僕を知っている人。

誰よりも……。

そうして僕は比べていく。

たとえ誰かを傷つけるとしても。たった一つの大切なものを、こ
れからも大切にしていくなために。

（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。空白に何があったかは、作者自身考えていません。つまり、
行き当たりばったり小説です！！ ゴメンナサイ…。こんな小説で
よければ、感想・批評待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4505a/>

空白にあるもの

2010年10月8日15時33分発行